

深江物語 (14)

本庄小学校の話(2) 校歌

深江塾 森 口 健 一

今回は本庄小学校の校歌の「歌詞」と「作曲者」の話である。
歌詞について

現在の校歌は、昭和二十二年（一九四七）十一月の学芸会で発表された。『本庄小国民学校沿革史』は「十一月二十三日（新嘗祭日）新装成った復旧の講堂で全一日に大プログラムの学芸会を民主的に実施 急作の校歌に始まり校歌に終わる（以上原文のママ）」と簡単に伝えている。

歌詞については、『沿革史』は何も記載していない。歌詞のみならず作詞・作曲者の名も記載がない。まず歌詞について校歌創作時から今日までの変遷について書く。

昭和三十五年度の卒業生に配布された校舎を背景にした校歌の写真がある（写真1）。校歌を書いた公式のものとしては一番古いものだろう。その写真にある歌詞の表記は次の通りである。
注・（ ）内は筆者記入。

(一)
茅渚の浦曲に 五輪のそびゆる
親和の学舎 さやかに陽をあび
心もゆたかに 生氣にみちみち
恵の潮に 仲よくむつばん



写真1 本庄小学校校歌

いざ強く 共に行かん

大志もて われら学童 わが本庄

(二)

武庫のやまやま 眺めはひらけて

浜のうら風 のどかに吹く里

歴史を語るか 青木の船うた

深江の老松^(おいら) 枝ぶりなつかし

いざぎよく古きひびき

身にうけて われら学童 わが本庄

(三)

東西文化の ^(豪華)ごうかに咲きそう

平和の郷土に 明るき学園

健康いやまし 心をつちかい^(培い)

世界のともども 手をとり仲よく

いざたたん 行くてはるけし

勇ましく われら学童 わが本庄

学校創立一〇〇周年に際して本庄小学校が平成十二年(二〇〇〇)一月三十日発行した『本庄のうつりかわり』という冊子に記載されている校歌の表記は、一番の出だしは「ちぬの浦和に 五輪のそびゆる」となっている。「ちぬの…」は大阪湾の別名でもあるが漢字が難しいのでひらがなに変えたのかもしれない。ただ、「うらわ」が「浦和」となっているのは感心できない。「ちぬの うらわ」の「うらわ」は漢字では「浦曲」で、雅語で

神戸市立 本庄小学校 校歌

作詞 藤田幸伸
作曲 信時 潔

1.ち 一ぬ の うらわ に ご りん の そび ゆる
2.む 一この やまや ま な がめ は ひら けて
3.と うざい ぶんか の ご うか に さき そう

し んわ の まな びや さ やか に ひを あび これ
は ま の うら かぜ の どか に ふく さと
へ いわ の きょう どに あ かる き がく えん け

こ ろも ゆ た かに セ いき に みち みち
き しを か た るか お おぎ の ふな うた
ん こ う い や まし こ ころ を つち かい

め ぐみ の うし おに な かよくむつ ば ん
ふ かえ の おい まつ え だぶりなつ か し
せ かい の と も ど も てをとりな か よ く

い ざつよく とともにゆかーん た いしもて
い ざきよく ふるきひびーき みにうけて } われらがくど
い ざたたん ゆくてはるけし いさましく }

わ が ほ ん じょう じょう

本庄小学校校歌 (本庄小学校提供)

入江や海岸の意味である。「浦和」は埼玉県の県庁所在地の都市名である。本来の歌詞の意味は、「大阪湾の岸辺に五輪の塔が聳え立つ我が学び舎」なのである。

三番の二節目が、「平和の郷土に 明るき楽園」となっている。それまでの歌詞は「楽園」ではなく「学園」だった。しかし「学園」が「楽園」となれば、学校とは何かという疑問すらおきかねない。

この表記についての変遷を元学校長の平山先生の協力を得て



写真2 藤田幸伸校長
1943年3月
本庄国民学校
卒業アルバムより

判明した結果を記しておく。
昭和三十六年までは、「うらわ」と「学園」の表記。それから三十年間は卒業アルバムに校歌の記載はない。平成五年（一九九三）から平成十八年（二〇〇六）の卒業アルバムには「浦和」と「楽園」の表記になっている。平成二十三年のアルバムには「楽園」は「学園」に変更されたが、「うらわ」は依然として「浦和」のままである。

作詞作曲者について
『沿革史』には、校歌が発表された様子を簡潔に記載しているが、既述の通り作詞者や作曲者については記載がない。作詞者と作曲者については公式の記録は現在不明である。証拠や史料としては不十分を承知で筆者の手元にある資料をもとに作詞作曲者について述べてみたい。

筆者が校歌の作詞作曲者が誰であるかを記した文書を見たのは平成二十八年（二〇一六）二月八日、本庄小学校の校長室だった。当時の上橋秀司校長の話によれば「平成二十七年八月ころに校歌の由来について外部の方から問い合わせがあった」「その時には公式記録がないので、詳細は不明と回答した」という話



写真3 潮田先生の諏訪山小学校へ転任の記念撮影（1960年3月17日）元本庄村役場だった本庄公民館前で。前列右から北城喜三郎・中田常太郎・潮田・永井庄左衛門元村長・永田広治・平井富士夫、後列右から柴田次郎・丹羽新一郎・前中芳太郎・太田垣正雄元助役・寺田好雄。村長・助役以外は元村会議員。

だった。その時校長から「由来は不明だがこんな文書がある」と「校歌制定の経過」という手書きの文書を頂いた。そこには作詞者が「藤田幸伸校長が作詞された」と記されている。

「校歌制定の経過」という文書は手書きで、文の末尾には「1990・1・26」と書いてある。その書面全文を原文のまま引用する。

いただいたかどうかは記憶にはなかった。
平成二十八年の二月に上橋校長から「校歌制定の経過」という文書を見せられて、初めて当時の校長が「藤田幸伸校長」であることを知り、校歌のメロディは「海行かば」などの大作曲家である信時潔氏の「兵庫県民歌」からの借用であることを知った。

校歌の「曲が兵庫県民歌から借用したものであるのではないか」との疑問ないし問題は、平成二十七年に伊丹市在住の音楽研究家の橋岡昌幸氏が兵庫県民歌の存在について調査している過程で、本庄小学校校歌との関連に行き着いたことが発端だった。兵庫県民歌は昭和二十二年（一九四七）二月一九日の「神戸新聞」によれば、新憲法公布記念事業として県が公募し、県内の小学校教師の方の作品（作詞）が一等となり、昭和二十二年二月一八日に発表された。この歌詞に作曲

家信時潔氏が同年三月に曲をつけ発表することになった。
たまたま県民歌を聞いた人が「この兵庫県民歌は本庄小学校の校歌の替え歌か」との疑問を橋岡氏に投げかけられた。氏は、神戸深江生活文化史料館や本庄小学校に問い合わせをされ、橋岡氏は『歴史と神戸』三三二号（二〇一七年）に『兵庫県民歌』

ゆいしす くさめす ておいむ はははは あつあひ かぐたと るべらし ししじ ゐんくいか みこせせ のにのの らふこへ くのい えたあわ んびさへ

ちせほり のののの つうくんの せこそえ けんふみん えい んん んん たかげ たゆあと にににに ももも ととと ららら れれれ わわわ わわわ ざざざ いいいい

ううう ひよひよ ががが わわわ ららら れれれ わわわ らくろう かんこそ

の戦後」という論文をまとめた。県民歌と校歌の楽譜を比較すれば音楽に無知の筆者にでも両者が同じ曲である事は分かった。
兵庫県民歌が発表されたのが昭和二十二年（一九四七）二月。本庄小学校校歌が発表されたのが昭和二十二年十一月。推測だが「戦災から復興新装成った講堂における学芸会での新校歌披

露に間に合うように、学校（校長）が作詞し曲は兵庫県民歌を借用した。『沿革史』に「急作の校歌」との記載はこのような事情があつた。著作権の問題はおそらく学校側も当初から認識していたのであろう。それゆえに「急作」とし、永らく平成二年（一九

筆者の母校である本庄小学校校歌が、兵庫県民歌の曲からの借用である事は疑いのないことを知った。校歌ができてから八十年近くになろうとしている。校歌創作時の経緯を知る教師の潮田義美先生や常国忠夫先生などもすでに鬼籍に入られている。伝統ある学校の校歌の由来（作曲者）が判明しているのに、い

つまでも不明・不詳というのは好ましくないと思い、このたびの記述に至った。

謝辞 本稿の執筆にあたっては、神戸市教育委員会、本庄小学校に資料の提供などで協力を得た。末筆ながら厚くお礼申し上げます。また兵庫県民歌の楽譜はWEBサイト「『兵庫県民歌』の記録と記憶」(<https://hyogopreisong.wixsite.com/jp28>)に掲げられている。

兵庫縣民歌決る

歌おう郷土の誇り

四月に盛大な發表會

郷士のほこ
り、長崎の
祖國町建
の三百萬
民の貧富
を憂へる
たむ新義
田舎事業
一 等 川辺郡小枝村学園字大
郷士野口猛(着馬場)
選民武蔵野
[著作] 龍影彰明字生中
六九郎長(金野)△大
阪平田市中殿町七河老
平(金野)△加賀郡田中
△西田村二一(二藤原)△
△西田村二一(二藤原)△
二田村二一(二藤原)△
並区天橋(二藤原)△
(金野)△頭取郷生野訪

兵庫縣民歌

[illegible]

あかきる源原	あかりの山々
雪の華にけりて	夢みはゆたかに
のびのび新緑	湖の意気
うきうきふんて	富士山をなぞりて
しらむねり	共におもひ
御所の眺むわれり	お笠屋

三

歴代はるけし	文化の水上
さやけき荒れに	ががやぐ人の名
ゆるなみ風流	ためまめ調進

神命はあまたしき 世紀のこの朝
 いざわれ 共に擲じむ
 民衆のほごりをわれら わが丘麓
 四
 ごそれりこの民 祖國の直礎
 希望の光は 天地に満ちたり
 雷荷にひるます 心をあはせて
 進歩はひこすじ 世界の平和へ
 いざわれ 共に進む
 永済の理想をわれら わが丘麓

屈せぬ、さういふ暗害をいそ
 げ、てかの明治、大正年代に
 わが兵隊が果した偉大な業
 績をあげ、もう一度暗害で
 ころせぬ、あきらめなせぬ、
 我々の歌は曲に作られ
 たらぬ、あきらめなせぬ、
 事、進んでいかなければならぬ
 上へ進んでいかなければならぬ

教壇生活十八年

一筆當選の野口猛氏



『等当派の野口蘆氏(四二)は
小学校卒業合独学で大阪府で檢
定試験をうけて本科正教員の名
許狀を得、川辺郡喜尾小学校代

野口氏は左のごとく当派の喜びを語る（元原は野口藩氏）

町(六)岩宮(膳所)(湯島)
 (八)尼崎(岸部)天明(五)
 阪(十)多(助)姫(八)岡(岡)
 縣(郡)吉(郡)花田(縣)
 (八)振保(郡)郡村(類)二
 八八(本)好美(國民學校) 僅す

一等選作は作曲家岡田民の
 手で三月七作曲の「主君」
 民歌として四月盛大演奏を

教壇生活十八年

一筆當選の野口猛氏

用教員を擧り出し、同郷主家、有馬郡三田國民學校の訓導となり、現在有馬郡生瀨國民學校教員に在る。少年時代から詩歌、繪圖に興味を持ち、雜誌その他に投稿してしばしば賞を得、かつ本社雑誌集した相生市歌に